

## ロバト・ブラウニングの生涯とその作品

三 谷 正

- (一) 生い立ち
- (二) ロバト・ブラウニングとエリザベス・バレットの恋と結婚
- (三) 「鈴と柘榴」「登場人物」「男と女」及びその他の詩
- (四) ブラウニングの晩年と「アソランド」「彫像と胸像」及びその他の詩

### 序

ブラウニングの詩は難解であると言われるのが通り相場となっている。しかしわたくしは、ブラウニングの事に処してのひたむきの心にひかれ、今迄、かれの傑作とか、名作とかを取り上げ鑑賞を試みて来た。この当りで傑作とか、名作とかに捉われずに、他のすべての作品をも取り上げ、ブラウニングの生涯とそれらの作品を結びつけて読めば、ブラウニングの人間と作品の特徴が、充分すぎる程、熟知され、しかも年令順に手をつければ誰にも難解の感じがうすれ、ブラウニングに対する親しみが倍加すると考え、ブラウニングに対し、食わず嫌いの感のある人々も、一冊でもブラウニングの詩を読み、やがては研究や鑑賞をする人の現われることを期待し、ここに「ブラウニングの生涯とその作品」と題し、かれの生涯と作品の概説を試みたのである。今後一人でも多くブラウニングの研究や鑑賞する人の出現を望むものである。

二 生い立ち

ロバート・ブラウニング〈Robert Browning〉は、時の桂冠詩人〈poet laureate〉テニンソン〈Alfred Tennyson〉と並び、十九世紀の二大詩人と称えられた。ブラウニングは一八二二年五月七日にテムズ河〈The Thames〉の南、ロンドン郊外キャンバーウエル〈Camberwell〉のサントントン街〈Southampton street〉に生れた。この辺りは、今は、あまり綺麗ではないが、当時は閑静で、自然の美しさに満ち溢れていた。実に、かれの生れた頃のキャンバーウエルは、小さな村で、家もまばらに建てられ、その周囲には畑や牧場があり、樹木も多く植えられ、デンマーク丘〈Denmark Hill〉やチャンピオン丘〈Champion Hill〉も緑が鬱蒼として、その麓には教会の尖塔が高く聳え、所謂「キャンバーウエルの美」を成していた。キーツ〈John Keats〉はハムステッド〈Hamstead〉でナイチンゲイル〈Nightingale〉の歌を聞いたが、ブラウニングもキャンバーウエルで鶯や燕が巢を作るのを見、「同じ歌を二度繰り返す」〈he sings each song twice over〉と次に引用する望郷の詩の、鵜の調べに耳を傾けたのであった。後年かれがイタリヤ旅行の際、望郷の想いに駆られて作った「異国より故里を想う」の一篇の場面は少年の頃のキャンバーウエルであったのかもしれない。

“Oh, to be in England

Now that April's there,

And whosoever wakes in England

Sees, some morning, unaware,

That the lowest boughs and the brush-wood sheaf

round the elm-tree bole are in tiny leaf,

While the chaffinch sings on the orchard bough

in England—now!

And after April, when May follows,

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

ロバート・ブライドの生涯とその作品

And the white-throat builds, and all the swallows!  
Hark, where my blossomed pear-tree in the hedge  
Leans to the field and scatters on the clover  
Blossoms and dew-drops—at the bent spray edge—  
That's the wise thrush! he sings each song twice over  
Lest you should think he never careless rapture  
The first fine careless rapture!  
And though the fields look rough with hoary dew,  
All will begay when noontide wakes anew,  
The buttercup s, the little children's dower,  
—Far bright than this gaudy melon flower!

「イギリスは今ぞ卯月

ああ、故里にあらまほし!

イギリスに目覚む者

とある朝、ふと見渡せば

榆の木の幹の周囲の、低枝と

下生の木叢、みな若葉つけ、

鶉、果樹園の枝に歌うを聞かん、

イギリスに——今! あらまほし

卯月過ぎ、皁月となりて

喉白やつばくらめ、皆巢を作るとき。

聴け！ 生垣に花咲き匂ふわが梨の木の

野へ傾きて、クロウヴァの上に花と露も

撒くあたり——たははなる小枝の尖に——

鳴くは慧しき鶉、同じ歌を二度繰返す。

初めの歌の麗しき朗なる調べを

繰返し得ずと、聞く人の思はぬため。

白露の野面すさまじく見ゆれども

物皆華やかならん真昼時、

さんぼうげ、子等の家づと、夢よりさめて——

いと輝やかし、この派手なるメロンの花に

いやまして！」（曾根保訳）

と。少年ブラウニングが半哩歩くと、かれがいつも通りかかって名画を見たダリッジ〈Dulwich〉絵画館があり、また、ダリッジの森には、時折デプシー〈Duppy〉が来てテント生活をし、その異様な服装や風習と彼等の歌う歌声に眼も耳も奪われる日も少くはなかった。かれの生い立つ環境はこのような恵まれたものであった。かれの上述の詩は果たせるかな、わが国の詩人薄田泣草に大いに影響を与えたのであった。泣草に次の詩がある。

「ああ、大和にしあらましかば

いま神無月

うは葉散り透く神無備の森の小路を

あかつき露に髪ぬれて往きこそかよへ、斑鳩へ」

ロバト・ブラウニングの生涯とその作品

ブラウニングの父は銀行員で相当な要職にあったので、生活的には多少余裕があった。また趣味の広い人もあったが、特に文学と芸術に理解が深かった。それ故に、多くのこの種の書が、かれの書架に充滿していた。またギリシャやローマの文学、芸術を深く理解し、中世の伝説にも通曉し、絵画も筆をとってかなり巧みに画くのであった。またポープ〈Alexander Pope〉流の英雄詩体二行連句〈heroic couplet〉の詩を書き、そして韻律の創作に於ける妙技を持っていた。これらのすべてが息子のブラウニングに詩人的素養を与えたようであった。母〈旧姓 Sarah Anna Wiedemann〉〈新姓 Sarah Anna Browning〉は音楽的才能を持ち、また宗教に熱心であった。ブラウニングに音楽的詩及び宗教的詩の多いのは、母のこの音楽的教養と宗教的信仰が息子に深い感化を与えたからであった。特に母のスコットランド的敬虔な信仰は息子に過分と言える程に深く伝わっていた。これがかれをして生涯を通じ母を深く慕わしめ、そのため、かれの晩年に於いても、亡き母の事を思う毎に眼に涙の浮ぶのを禁じ得なかった。両親は共に信仰の深い人達であったが国教徒でなかったのでブラウニングはパブリックスクール〈public school〉に行けなかった。そのため、八才から十四才まで、かれの家から一哩もはなれた牧師トマス・レディ〈Rev. Thomas Ready〉の塾に通学した。だがかれは他の少年よりずっと頭が良く成績がよかったので他の少年や、少年の母親達の妬みが生じ、また、その塾では学ぶべきものもあまりなかった。その塾に行くのをやめ、家庭にあって、父と家庭教師〈tutor〉とまた芸能の師匠について勉強した。そして勉強の内容は、父からは高等な学問を学び、家庭教師からは普通の学問を収め、その他のもの即ち音楽、舞踏、乗馬、拳闘などを、それぞれの師匠に家へ来てもらって習うのであった。この師匠達の親切な指導とかれの熱心な研究心とで、かれの多方面な趣味は充分に養われた。やがて十六才の時、ロンドン大学〈London University〉即ち今日の University College が設立されるに当り、父が寄附をした関係もあって、たやすく入学ができたのに、わづか一学期だけの通学でやめてしまった。これはかれの頭脳を信じすぎた我侷と言えるものである。これがかれの受けた唯一の大学教育であった。それで最も深い、或は最も高いかれの学識を得たのは、父の書齋に於ける読書からであると言える。またかれの美術趣味は程遠からぬダルウッチ美術館〈Dulwich Gallery〉に未だ入場を許されぬ年頃から、特に入場を乞うて、古来の名画に見入ったことがかれの美術観に大いに影響したと言えるのである。これらのこと考えると、かれを創造的詩人たらしめたのは、大学ではなく、父の書物や美術館の絵画による家庭にあってのかれの勉強への努力であったと思われる。また父も大学よりも家庭教育による個人指導の方が効果的であると信じ、本人の努力を基本とする個人指導の教育が、集団教育よりも大切であると信じた上で、父が息子を大学からはなしたの

ではないかとも考えられる。また父の愛情から直接自らが子を教育してみたものではあるまいか。それというのは、父はフランス、イタリア、スペインの古い文学を知り、十八世紀流の詩ではあったが、自由に詩作し、ギリシャ語、ラテン語も心得ていて、幼い頃のブラウニングを、ギリシャ語或はラテン語のオード〈Ode〉(賦)を子守歌のようにして寝る習慣がつけられたとも言われている。父の蔵書は文学、芸術が主たるものであったが、怪奇的なもの、捕物趣味のもの、絵画の歴史の本など多方面にわたっていた。それで子供の頃から父の詩才をうけて子供なりの詩を作り、それらを集めたのが“*Incondita*”という表題の一冊本であった。これが十二才の子供の仕事とは驚く次第である。両親はそれを出版したく思ったが、応じる書肆がなかったので、そのまま永い間、かれの家庭内に保管されていたが、やがて本人によって破棄されてしまったことは惜しむべきできごとであった。“*Incondita*”の称讃者の一人なる Miss Eliza Flower は音楽にすぐれ、多くの作曲を後年まで残している。このイライザ・フラワーに敬服していたブラウニングは、当時十二才の少年であったのに、九才年上のかの女を深く恋していたとも伝えられている。“*Incondita*”はその出版に応じる人は誰もなかったが、フラワー姉妹〈Eliza and Sarah Flower〉の手にわたり妹のサラはその中の二つの詩を写してかの女達の後見人フォックス〈W. J. Fox〉に送った。フォックスはこの二つの詩即ち“*The First Born of Egypt*”と“*The Dance of Death*”を称讃したが、その批評に於いて、言語は華美に過ぎ、思想は貧困と言ったそうである。「ポーリン〈Pauline〉」を最初に批評し、「パラセルサス〈Paracelsus〉」の出版者を見つけてくれたのはこのフォックスであり、またブラウニングが「文筆の父〈literary father〉」と呼んだのもこのフォックスであった。“*Incondita*”は結句本人の手で破棄されてしまった。しかし六年後にブラウニングに「ポーリン」を書かせたのは Eliza Flower であった。また妹の Sarah Flower はあの有名な讃美歌「主よみもとに近づかん〈Nearer, my God, to thee〉」を書いた信仰の深い乙女であった。ブラウニングは一八三三年に叔母から貰った金で「ポーリン」を初めて世に送った。だが一冊も売なかった。その翌年ロシアに旅行し“*I van I vanorich*”を出版した。この書の出版後わづか二年で「パラセルサス」を世に送った。この書即ち「パラセルサス」は「ポーリン」よりも文学的価値の高いものである。「パラセルサス」の主人公パラセルサスは当時の偉大な化学者、匡学者であったが、それだけにまた当時の多くの学者の独断的因襲的な態度に飽き足らず、従来の学問の最高權威とされた幾多の匡学書を投げ出し焼いてしまい、広く山野を跋涉し、自然を学問の最高權威と考えるのであった。そして自ら学ぶべき最良の書は自然であると主張し、自然を直接観察することにより、多くの発見を遂げ、近代化学に革命的業績を残した。また一方自らの発見せる化学上、薬学上、医学上の薬品は、そ

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

重要な性を外面よりも内面に置き、内面に存在する生命力の人生に於ける重要性を主張した神秘主義的哲学者でもあった。だから学問上では以上のようなことを考える人間であっても、人間それ自身即ち自己そのものを考えるときは、矢張り実在の人間としての化学者、哲学者パラセルサスという実在の人間であると肯定せざるを得ないのであった。そして実在の人間としての思想を考える場合次のように考えざるを得なくなるのであった。即ち普通、科学者、哲学者と言われるような人間は、兎角、人間として冷たい非人間の面が濃厚である。この劇の作者ブラウニングはここに重点を置き、この劇を描くに当たり科学者且つ哲学者パラセルサスを人間味豊かな生きた人間として描いたのであった。即ち表面的には非人間的に見えるパラセルサスを、親友アプリール (Aplil) がパラセルサスに情をこめた芸術観を説いて、また熱の籠もった友情の絆を廻って、かれをいかに生き生きとした人間味豊かな人間に変えられるかを、ブラウニングはこの詩で歌いたかったのである。即ちパラセルサス自らは科学的知慧によって物象の外面的知慧の追求をなすも、結局、神秘的哲学者の面から、生命観的知慧により、生命の神秘に触れ、かれの求めてやまぬ絶対的知慧を追求して永遠の生命に触れることになることを述べようとするのが、ブラウニングの求めるこの劇的独白詩なのである。このため当時第一流の批評家ジョン・フォースター (John Forster) の称讃を受け、またゲーテ (Goethe) の「ファースト (Fauster)」と比較しても見おとりのしない偉大な詩であるという批評家も現われ、そのため、ブラウニングは一躍して当時の文学者達との交際が始まるのであった。

## (二) ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレットの恋と結婚

バレット (Elizabeth Barrett) は十五才の頃、或る日小馬に鞍を置いてある時、よろめいて倒れ、頭と背骨をひどく痛めたのが原因で病弱 (肺病、結核) の身となり、病床にいたままの毎日を過していた。そんな身でありながら、多くの詩を創り発表し、テニソンの後を追う桂冠詩人に擬せられる程の名のある女流詩人 (poetess) であった。ある時、かの女は自らの「詩集 (Poems)」の中の「Lady Geraldines Courtship」の中で

“Or from Browning some pomegrates, which if cut deep down the middle

Shews a heart which blood-tinctured a veined humanity.” ll. 263-264

「また、ブラウニングから柘榴を  
これをもし真中まで深く切れば  
血の通う人間の真赤な血の中に

心臓が現われる」(拙訳)

と歌ってかの女の詩の中でブラウニングの詩に触れ、かれの詩を称讃したことがあった。未だ詩人として世間に認められていなかったブラウニングの喜びは大変なものであった。この喜びの最中に、書肆モクソン〈Moxon〉から出版のすすめがあった。それは、一八四一年からのブラウニングの既成の詩とこれから創る詩を、二段組十六頁の小冊子として連続出版することであった。この叢書を「鈴と柘榴〈Bells and Pomegranates〉と名づけた。その時、バレットの従兄に当る「ジョン・ケニオン〈John Kenyon〉」がブラウニングに、一つ手紙をバレットに出してみてもどうかと勧めたので、ブラウニングは大喜びで一通の手紙を出してみた。ブラウニングがケニオンとどうして知るに到ったかと言えば次のことからである。このジョン・ケニオンはラム〈Charles Lamb〉の友人であり、当時有名な俳優マクレディの後援者であった。そして伝記作者、詩人、随筆家、創作家と幅の広い Field Talourd がその家に、芸術家、文士、法律家など大勢の人を招待したことがあった。そのときケニオンもブラウニングも招待されそこで始めて知り合いとなり、これが切っ掛けとなって、ブラウニングとケニオンは交際が始まったのである。このケニオンのすすめで手紙を出したのが縁えんとなってブラウニングと、かの女の間に深い親愛の情が沸き、手紙の交換が始まり、これが重なる毎ごとに親愛の情も増すようになった。年令から言えばブラウニングはバレットより六つ年下であった。しかし遂に一八四五年五月にかれとかの女は会ったのである。何の因縁か、頑健そのもののブラウニングは病弱のバレットを一目見た瞬間に、かの女に恋してしまったのである。その後かれは添削の手紙も出したが、恋文の方がずっと多く、何回となく書き送った。かの女は、かれがいくら恋と求婚の手紙を送って来ても病弱と年上の理由を告げて頑健なかれが病弱のかの女に結婚を申しでるなどは勿体無く思われると心情をつけ、かれの恋と結婚を拒むのであった。しかしかれは、かれの愛の力で、かの女の病気を治してみせると言い、かの女への愛を断念せず益々多くの愛の手紙を送りつづけるのであった。かの女は、頑健な男の中の男のかれに對し、病弱と姥桜の自らを思えば、かれとの結婚など決してはならないと更に強く心に決めていた。しかし拒絶の手紙はいづれも極めて丁寧で、極めて優しい返事であった(この丁寧な優しい手紙はかれに對するかの女の愛を暗示していた)けれどもかれは決して求婚を断念しな

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

った。到頭かの女はことわりきれず却ってかの女の方がかれに恋心を覚え、自らの恋を打ちあける始末となってしまう。当然ながらかれの喜びは、喜びの絶頂となってしまった。勿論、かの女とて、女性として生れた以上、たとえ病弱の身であっても結婚ができれば、他にこれ以上の幸福はあり得ないのではないかと自らの心に尋ねてみた。するとかの女の心も一瞬喜びの焰を仄めかすのであった。かの女のこの一瞬の心の仄めきを、いち早く推察したかれは、執拗と思える程、更に一層熱烈に求婚するのであった。かの女は遂に折れ、既に述べたように、一八四五年の夏二人はいよいよ会うこととなり、そしてかの女は遂に父〈Edward Moulton Barrett〉の反対を押し切って結婚する決心をしたのであった。しかしこの決心をなし得たについては、父の唯一の弟即ちかの女の叔父〈Samuel Barrett〉の遺産を継承していたことも深い関係があった。即ち生活には経済的心配がなかったからであった。そして遂に翌年の九月十二日に二人は、示し合わせて、ロンドンの Marylebone Church で、ひそかに結婚式をあげ、同日二人は海を越えてフランスに渡り、パリを経由してイタリアに行き着くのであった。差し当たりその冬はピザ〈Pisa〉で過ごし、翌春フロレンス〈Florence〉に行き、そこに居を定めるのであった。その後数年間は、そこを本拠地とし、イタリアの各地を旅行し廻った。この旅行でブラウニングは病妻を勞わり、山道では病妻の手を引き、河を渡る時は妻を背に乗せるなどをして、愛情の限りを尽くすのであった。こうした二人の非常な幸福な中へ、更に一つの幸福が加わった。それは病弱のかの女に男の子〈Wiedemann Barrett Browning〉の生れたことであった。然るにその二日後に、ブラウニングの母〈Sarah Anna Browning〉が亡くなった知らせが来た。かれの心は何とも表現のできない深い悲しみに満されたのであった。でも今はぐずぐずしてはいられず急遽帰国し、極めて厳粛に葬儀を行い、うしろ髪をひかれる思いのうちにロンドンを去り、パリに行き、そこで冬を過して一八五二年の六月の末に再びロンドンに帰り、同年の夏はパリで過した。しかしまた十一月にはフロレンスへ行った。それから後は、或る時はローマに逗留し、また或る時はロンドンに帰るなどして病妻の身体の状態によって居所を変え愛妻の病状に非常な注意を払うのであった。然るに一八六一年の春、愛妻の病氣は悪化を辿るばかりなので、思いきって、かれはフロレンスに帰った。しかしかの女は、同年の六月二十九日に、かの女の最も愛する夫の手に抱かれて遂にこの世を去ったのである。

### (三) 「鈴と柘榴」「登場人物」「男と女」及びその他の詩

ブラウニングは書肆モクソン〈Moxon〉のすすめにより、一八四一年からの既成の詩とその後の作品を、二段組十六頁の小冊子として、連続出版することにした。そしてこの叢書を「鈴と柘榴」と名づけたことは既に述べたことであるが、この名称については、ユダヤの教師がその法衣について言っている次の言葉が参考になる。法衣の裾は青紫紅の糸を用いて柘榴をつくり、それを裾の周囲につけ、また裾の周囲の柘榴と柘榴の間に金の鈴をつけるべきこと、即ち法衣の裾には金の鈴と柘榴が交互につけられるものを着用すべきであるとユダヤの法教師の間に言われていたということである。これは、涼しい鈴のひびきと鮮明な柘榴の生彩がブラウニングの想像力を強くし、もののイメージを深く捉え得ることができるとブラウニングが考えたことを示している。即ち音楽と談論、音のひびきと感覚、詩と思想がびったりと完全に背中合せができるブラウニングが考えたことを示すのである。「鈴と柘榴」は一八四一年から四六年まで、不定期にモクソンから出版され、費用は父が負担するのであった。ブラウニングは初版の序文の中で、かれがこの出版方法を採用した理由を説明して、平土間一杯の鼻屑客が「ストラフォード〈Stratford〉」に喝采を送って以来、かれは何か彼等の好意に報いたいと思っていたので、今度の本でこのことを述べたく、その序文の終りに、この廉価版がもう一度私に、いわば平土間の顧客を与えてもらえようと思おうと嬉しさの極みであると言っているのであった。この叢書の計画は最初、悲劇「ストラフォード」の修正版だけをのせることにしたかったのであったが、初めの二部が大して売れなかつたためか、モクソンが芝居好きの人だけでなく、一般の人にも受けてもらえるような短詩をも入れることをすすめたので、一八四二年の劇的抒情詩と一八四五年の劇的浪漫詩とが加えられた。更にこれを簡単に説明すれば、ユダヤの教師の衣の裾に垂した金の鈴と青赤紫の柘榴形の飾に因んだ劇的詩としたのであるが、結局、説教味の少しある音楽と感覚的な音と思想の三つがともなった詩の三つの交じったものにしたという意味である。またブラウニングはこの詩集の巻末に、音楽と談論、音響と感覚、詩と思想との交錯或は混淆を表現するために用いられた名称であると説明している。そして第一巻は劇詩「ピパが通る」である。これを第一巻においたのはかれに平素から次のような詩人としての気持がその心に満ちていたからである。かれがダリッチの森を独りぶらぶらしている時、ただ独り人生を過ぎ行く者の幻が突然かれの脳裏に閃いた。即ち自分の身は微賤の身である。それ故に自分の足跡を世に残すことなどは到底出来ない。しかし自分は意識せずとも、しかも永続的な影響をその一步毎に周囲の者に与えるかも

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

しれないと感ぜられ、こんな幻<sup>まほろし</sup>が心に浮びそれがアソロ〈Asolo〉の可愛い糸取娘ピパ、無邪気な歌を口に<sup>くち</sup>する乙女ピパとして具体化すれば幾多の人々に深刻な印象を与え、その運命を左右することが出来るとの思いが、ふとかれの心に浮んだのであった。一八四二年第二巻は「ヴィクター王とチャールズ王〈King Victor and King Charles〉」<sup>⑤</sup>である。権力をめぐっては親子、兄弟と雖も血の争いをするのが浮世の姿である。傲慢なヴィクター王は白らの都合の悪い時には王位を王子チャールズに譲りながらも、子のチャールズ王の善政によって国威が恢復に向うようになるや、ヴィクター王は無理にチャールズ王を王座から引きおろそうとするのであった。そして今の隠居のチェンバリー〈Chambery〉城を出て、チャールズ王の住むタリン〈Turin〉の王城に突然現われ、王冠に近づくのである。ヴィクター王の心を知るチャールズ王は、父としての愛情に乏しいヴィクター王ではあるが、その父に素直に王位を譲ろうと考えた。そこでチャールズ王はヴィクター王が王冠に近づくや、チャールズ王自らがヴィクター王の頭に王冠を置くのであった。かくしてチャールズ王は、父のヴィクター王に何の蟠りもなく、王冠を返すのであった。このようなチャールズ王の孝心を極めてあざやかに歌いあげているのである。この劇は読めば読むほど愛<sup>いと</sup>しい親子関係が、現在ならば、いざ知らず、十六世紀にもあったことは珍しい<sup>めずらしい</sup>ことでわれわれに深い感銘を与える悲劇である。一八四三年第三巻には「劇的抒情詩〈Dramatic Lyrics〉」を当てているが、その中に「クリステイナ〈Christina〉」<sup>⑥</sup>及び劇的独白詩〈dramatic monologue〉の珠玉の「わたくしの先きの公爵夫人」<sup>⑦</sup>〈My Last Duchess〉及び「ポーフィリアの恋人〈Porphyra's Lover〉」などの逸品が集められ、また、余白の埋草に有名な児童物語「ハメリンのまんだら笛吹〈The Pied Piper Hamelin〉」が入っている。一八四三年第四巻は悲劇としての傑作「紋地の汚れ」〈A Blot in the 'sutchon〉」が入っている。底知れぬほど互の愛情の深い兄妹が、兄の思い違いから、妹の恋人を身分の低い者と思ひ込み、妹がそんな男に恋をして結婚すれば家紋の汚れとなると思い込み、妹の恋人を兄が殺してしまうという涙なくしては読み得ない悲劇である。一八四三年八月には更に「ドルーズ人の祖国への帰還」<sup>⑧</sup>〈The Return of the Druzes〉」が出る。民族の愛国の情の深さを物語るもので劇としての舞台も当時としては立派であり、台詞も極めて明快であり、主人公チャバル〈Djabal〉及びアナル〈Anael〉の二人は互に恋をしながらも共に紹神〈incarnation〉を信じ、ローマの派遣軍などを物の数としない東洋武士道が表現されて極めて興味の深い劇である。一八四四年第五巻には「Colombe's Birthday」が当てられ、この年から翌年にかけて、第六巻は単行本とせず Hood's Magazine に寄稿した小冊子とし、簡単な「The Boy and the Angel」「The Englishman in Italy」などが寄稿された小冊子として仕上げられている。第六巻も単行本とせず、すべて Hood's Magazine

にたのまれて投稿した形の小冊子として売り出している。第七巻には読者が少し飽きが来そうなので、それを防ぐために、短篇及び改訂の“The Boy and the Angel”や“The Flight of the Duchess”を一つとして No. VII として売り出し、その翌年に“Luria”や“A School's Tragedy”を合せて No. VIII として“How they Brought the good news”“The Lost Leader”“Meeting at night”“The Englishman in Italy”<sup>⑩</sup>などの出色の作品及び、その翌年“Luria”“A School Tragedy”を合せて VIII として“Bells and Pomegranates”の終巻としている。幽明境を異にした愛妻は天国に、自らは浮世にいるという言葉では何とも表現し得ない淋しい状況の下に、換言すれば晴れやかな声のひびく家庭ではなく、従って陽気の漂う家庭ではなく、極めて憂鬱な、妻なき暗い家庭で詩を創り、文学に精進するうちに早くも一八六四年となり、その年にかれを一流の詩人の仲間入りをさせた「登場人物〈Dramatic Personae〉」が出版されたのである。この書には「アプト・ヴォーグラー<sup>⑪</sup>〈Abt Vogler〉」や「ラバイ・ベネズラ」<sup>⑫</sup>〈Rabi Benetra〉等のかれの芸術観や宗教観を現わす傑作が十八篇も含まれている。かれはこの書によって真の意味に於ける一流の詩人の仲間入りをすることができるようになった。ここでかれのそれまでに出版された作品が多くの詩人によって見直されはじめたのである。その第一番手が「男と女〈Men and Women〉」である。この詩集は第一巻が二十七篇、第二巻が二十四篇の作品からなり、愛、芸術、人生などのテーマを、ブラウニングの最も得意とする劇的独白〈Dramatic monologue〉の形式で歌われた詩集である。第一巻には厨川白村の「近代の恋愛観」に影響を与えたといわれる恋愛至上主義をうたった「廢墟の恋〈Love among the Ruins〉」や十五世紀のフロレンスの画僧の芸術観を述べた劇的独白詩「フラ・リポ・リビ」<sup>⑬</sup>〈Fra Lippo Lippi〉などが入っており、第二巻には牧童ダビデ〈David〉が入っており、またその牧童ダビデが堅琴〈Harp〉をひいて、イスラエル王サウル〈Saul〉を死の絶望から救う宗教詩「サウル〈Saul〉」や、新約聖書に出る詩人に取材した哲学的な詩「クリーオン」<sup>⑭</sup>また、老らくの恋即ち老人が若者に対する恋は若者同志の恋には勝てないことをテーマとした短かいが称讃にあたいする劇「露台にて」<sup>⑮</sup>〈In a Balcony〉などが含まれている。これらの劇は皆かれの叙情性に富む劇詩であるが、詩の批評家でアメリカのフェルプス〈William Lyon Phelps〉はその著「ブラウニング〈Browning〉」の中でブラウニングの詩を純粹抒情詩〈pure lyric〉と劇的抒情詩〈Dramatic lyric〉に分け次のように説明している。一般に抒情詩は二つに分けることができる。即ち純粹抒情詩と劇的抒情詩の二つに分けることができる。普通の抒情詩即ちフェルプスの言う純粹抒情詩は作者即ち主観の感情を直接に述べるものであるに對し、劇的抒情詩は間接に主観の感情を述べるものである。ブラウニングは、かれの抒情詩を劇的抒情詩と言っている。dramatic

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

という単語は drama の形容詞である。drama 即ち劇では作者即ち主観は隠されて、登場人物が作者に代って間接的に作者の感情を観客或は読者に伝える客観的芸術である。故に drama はその形容詞 dramatic も間接的、客観的という意味の響きがある。Lyric が主観の感情を直接伝えるものとするれば Lyric には直接的、主観的の響きがあるのは当然である。かるが故にこの Lyric に dramatic を結合するのは矛盾語法と言えると思う。矛盾語法は「有難迷惑〈cruel kindness〉」或は「不調和の調話〈harmonious disorder〉」が示すように互に正反対の意味をもつ言葉の結合によって一見矛盾した観急を与えながら、実は真理を含む語法である。ブラウニングの dramatic lyric も相容れない意味の結合であって、外面的には矛盾するのであるが、内容的には決して矛盾しない言葉となっている。即ちかれの劇的抒情詩に於いては、かれの主観は隠されて、読者或は観客には見えないが、作者ブラウニングは聞く相手があるかのように、その詩に登場する人物によって自らの感情を間接的に述べさせているのである。従ってかれは dramatic を lyric に結合したのである。次に普通の意味での lyric はこの項の冒頭に述べたように、主観の感情を直接的に述べた詩であるが故に、主観詩と言われ、叙事詩、叙景詩などの客観詩と区別されるのである。換言すれば抒情詩の中心は主観であり、客観の対象ではない。従ってかれも自らの抒情詩を dramatic lyric と称して dramatic を附加していても、やはりかれのわれわれに伝えようとするのは、かれ即ち主観の感情を表明することを意図していることは明瞭である。故にかれが自らの抒情詩を dramatic lyric と言ったのはかれとしては矛盾しないのであった。勿論かれの詩にもフェルプスが言うように純粹抒情詩と劇的抒情詩に分けることができ、前者の例が「異国より故郷を想う」や「海外より故郷を想う」である。しかしかれの抒情詩の大部分は後者に属するものである。かくかれが抒情詩に dramatic を附加したり、Romance にまで dramatic を附加して直接自らの感情を述べることを避け、間接的表現を好むのは、かれが生れながらに演劇的性格を持っていたからである。またこの詩集「男と女」はかれの作品中で当時最も人気を得たものであり、今日でも尚も、人気のある詩集である。この詩集はかれの成熟期の作であり、力の満ちたものであると共に、その形式がかれの才能に最も適した劇的独白で妙味があったためである。「Robert Browning and his Poetry」の著者 Ernest Rhys は「地震とか火事とかの危急の場合にブラウニングの作を一冊持ち出すとすれば自分は『男と女』を持ち出すだろう」と言っている。しかし再版は出なかった。然るにかれは一八六三年の全集に於いて、この詩の分配を行い一冊の例外を除き、大体は劇的独白で書いている。従って meditation, aside, soliloquy のついででもなへ dramatic monologue で通したのである。登場人物の危機的瞬間〈critical moment〉を捉え、その性格、境遇、行動を巧みに表現し、また観客や読者が、それぞれ好

きなように、その詩を味うように書かれている。かれの詩集の中には既に述べたもの以外に次のような名篇がある。“Evelyn Hope” “The Last Rider Together” “One Way of Love” “Any Wife to Any Husband” “A Woman's Last Word” “By the Fireside” “In a gondola” “The Worst of it” “Porphyria's Lover” “James Lee's Wife” “One Word More” “Lyric Lover” etc. ⑧ これらは皆、登場人物がその相手の恋人に直接に呼びかけた愛の詩である。また神への愛に就いての宗教詩が思いの外に多いのである。そしてまた“Cleon”のようなキリスト教に接触した異教徒の宗教的な愛もあり、また「サウル」や「ライバイ・ベネズラ」のような異教徒のイスラエル人がキリスト教に接触してあらわす宗教愛を現わすものもある。殊に「ラバイ・ベネズラ」はブラウニングの宗教観を最もよく表わしている。また「フラ・リポ・リピ」「アンドレア・デルサルト」「アプト・ヴォーグラ」のそれぞれはブラウニングの宗教観を示しながらも、かれの深い芸術観を示したものである。例えば「フラ・リポ・リピ」に次の言葉がある。

「美も、不思議も、力も、ものの形、色、明暗、変化、驚異などのすべては神の創りしものである。何のためと言うのかい。君達は神を有難く思うかい。思わぬかい。どうじゃな。それは何のためかと言えばこの美しい町の姿、向うの川の流れ、その回りの山、頭上の空などの存在のためなんだ。しかもそれにもまして、それらに取り囲まかれた人間男女、子供の存在のためなんだ。そのためにこそ、神はそれらを創られたのじゃ。とすれば、それらを一体どう受け止めるべきかね。われわれはこれを見逃したり、軽視したりしてよいものか。それとも、それを素晴らしいものとして、心に留めて置くべきものか。無論、後者であると言いたいのか。そしてわれわれはこれらを結果など構わずにどしどしありのままに画くべきなんだ。だのに、なぜ拙者の言う通りに人はしないのか。神の創られたものは何でも画け、そしてありのままに画け。ありのままに画かないと罰があたるぞ」⑨と。また「アンドレア・デルサルト」の中でアンドレアは次のように言う。

「すべては神の掌中にある。その上、刺戟は自らの魂そのものから来るのだ。他のものは何の役にもたたぬ。……、この世に於いては、事をなすことのできるものは、事をなそうとしない。事をなそうとするものは事をなし得ない。しかも、なさそうとする意志には価値があり、また、その力量も価値がある。かくして、われわれ半人前の人間も奮闘するのだ。最後に神が、報酬を与えるべきか、罰を与えるかを決定するのだ」⑩

また「アプト・ヴォーグラ」の中でヴォーグラは次のように言う。

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

「されど、われの救わるは、

常に変ることなく同じきもの、

常に変ることなき同じ性質なるもの、

常に変ることなく愛するもの、

常に変ることなき神そのもの、

然り、過去にあり、

永えにあるものこそ、

われ、心より縫るなり。

かるが故に、われ、なんじ神聖の御名のほか誰に向わん。

手ならぬ手もて、わが殿堂を築ける、なんじ建設者よ、創造者よ<sup>②</sup>

と。以上三つの詩は、同名の画工を題材としたものでイタリアのルネッサンスに関するものである。また、最も短かくて最も有名なのは「私の先きの公爵夫人」である。フェルプスはこれを「すべての文学に於ける最高の劇的独白であり、またその劇的独白の中の最高のものの一つである」と言っている。またこれと反対に最も長く最も有名で、ブラウニングの最大の傑作が「指環と書物」である。これは一八六八年から一八六九年にかけて創られたものである。その構想は実に独特のものであって十冊の本から成り、同一の事件をそれぞれ異った人が異った立場から見たことを口にするのである。その中で「法王〈Pope〉」の巻と「ポンピリア〈Pomplia〉」の巻が最もすぐれていると私は思うのであるが、「ギドゥ〈Guido〉」の巻と「カポンサッキ〈Caponsacchi〉」の巻をあげる人もある。「ポンピリア」の巻のポンピリアは「ピパが通る」のピパと共に、ブラウニングの描いた女性中に亡妻バレットの姿を取り入れ、最も立派に描かれている。ブラウニングは哲学者、宗教学家、思想家、時には世の指導者であるとよく言われるが、かれはその何者でもある。しかし何と言ってもかれの本領はやはり詩人であり、劇詩人であることは否めないのである。この現実世界の何ものにも精通する幅の広い大詩人であることは否めないことである。ただその詩が難解なのは欠点と言えようとも考えられる。しかしかれの描いた女性中最もよく描かれた「ポンピリア」の巻或は「ピパが通る」を読めば難解の感はなくなると思わ

れる。けれどもブラウニングの詩は、やはり以前ほどは読まれなくなっている。これは、ブラウニングの詩に含む思想が、かつては歓迎されたが、今日では以前ほど持て囃されず、その上、かれの生活した時代が悪い意味での Victorianism が横行した時代であったため、その反動で、所謂教える詩を現代人は好まないからである。しかしかれの劇的独白の形式から現代詩が、生れ変わったのであるから、やや持ち直す気運も生じているので、私は、それを大変嬉しく思っている。

#### 四) ブラウニングの晩年と「アソランド」「彫像と胸像」及びその他の詩

一八八九年の夏、これはブラウニングにとっては最後の夏となったが、この夏をかれはイタリアのアソロ (Asolo) で過した。そして秋になってヴェニス (Venice) の美しいわが子の家に移った。年令は既に七十才ではあったが、その元氣は少しも衰えないように見えた。又かれの外貌も習慣も大して変わった様子はなかった。ところが風邪を引いたのが原因で気管支炎を起し、心臓病を併発して床について。しかし最後の日の午後にはかれは起きて室内を歩いたとも言われている。かれがこの世を去ったのは一八八九年の十二月十二日であった。かれが息を引取る数分前にロンドンから電報が着いて、その日に、かれの詩集が発行されたことを知らせたのであった。かれの喜びは、喜びの頂点ともいうべきものであった。この詩集は「Asoland」であった。ヴェニス市はかれの逗留していた家にブラウニングの碑を建て、そのなかれの詩から取った次の言葉が誌してある。

“Open my heart and you will see

Graeved inside of it, 'Italy'”

De gustibus, II. 43-44

「わが胸を開け、さらば見ん

内側に『イタリア』と刻まれてあるを」

(曾根保訳)

十二月三十一日かれの遺骸はロンドン<sup>の</sup> West Minster Abbey に葬られた。ブラウニングは非常に健康で、病気を殆んど知らなかった。そ

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

の子 Barret Browning は、最後の病を除くと父の病床にあるのを見たことがなかったと言ったそうである。テニソンやカーライルへ Thomas Carlyle と違って、煙草をすわなかった。乗馬や歩行を好んで、出来る限り他の乗りものに乗らなかつた。片目は遠くが見え、他の目は近眼であった。読んだり書いたりする時は、いつも一つの目をつぶって他の一つの目を用いるのであった。しかし眼鏡は用いながかつた。散歩でもする時は近眼の方の片眼をつぶって他の眼を用いるのであった。かれは音楽が好きで、これに関する知識も豊かであり、立派な批評家であった。かれの著しい性格の一つに少年的な活気と熱心があつた。テニソンは交際社会を好まなかつたが、ブラウニングは好んでこれに出入した。テニソンとブラウニングの風貌を比較するとテニソンはいかにも詩人らしい様子をしていたのに対し、ブラウニングはどう見ても、物のよくわかる実業界の成功者としか見えなかつた。テニソンは年令からは三つ年上であつた。そのためというわけでもないが、ブラウニングはテニソンの詩をよく読んだ。テニソンが八十才の誕生日を迎えた時、ブラウニングはかれに祝の手紙を送つたりしてゐた。ブラウニングは詩の題材を自然よりも都会に求めた。当時の詩人の多くが自然一辺倒であつたのに対し、ブラウニングは都会や工場の雑沓、争闘、混乱に一層の興味を持つてゐた。かれはそれらの中に、即ち争闘、混乱、勝負、罪惡、屈辱の中に人間の性格が作られる熔炉を見たのであつた。人生の衝突、争闘に心を引かれたのであつた。かれは言つてゐる。

“This world's no blot for us

Nor blank: it means intensely, and means good :

To find its meaning is my drink.”

Fra Lippo Lippi, II. 313-315

「この世はわれわれにとって決して汚れたものじゃない。

また虚ろなものじゃない。

うんと意味があり、よいものだ。こんなわけで、この世の意味づけをする

ことが拙者の飯であり、酒なんじゃ。

これが拙者の生き甲斐というものかな」

と。ブラウニングはあらゆる物に意味のあることを認め、その意味を大切にした。ここから人生のあらゆるものに興味をもっていったことがわかる。かれは自らを高くして卑しいもの、汚いものを避けるといふことはなかった。かれの興味とか同情は一般的で、立派な教養のある人に対しても、人生の戦に悪戦苦闘している民衆に対しても同じく同情と愛を持っていた。「ピパは通る」の中のピパなる乙女にも、妻に悪行をこととしたギドウの劇的独白にもブラウニングの同情の念が表現されている。ブラウニングには優柔不断は最も好まぬものの一つであった。ブラウニングは自らに勇気を求めたのである。障碍に抵抗して始めて人間は強くなると信じていた。かれに「彫像と胸像〈The Statue and the Bust〉」という詩がある。フロレンスの広場〈Piazza〉に彫像があり、向いの城の一つの窓の上に胸像がある。彫像は太公フェルディナンド〈Great Duke Ferdinand〉の騎馬像である。一方真向いのリカルド館〈Palazz Riccardi〉の一つの窓の上に胸像が揚げられている。これはリカルディ新夫人の胸像である。そして太公フェルディナンドの彫像とリカルディ新夫人の胸像は相對している。それはリカルディ新夫人が馬上の太公を見て初めて真の恋を知り、太公も亦夫人を見て初めて恋を知り、互にその意中を知るに到ったのである。そしてこのことを夫リカルディも推察したのであった。そこで夫は怒って新夫人をその室に監禁したのであった。夫人は明日にも太公の許に走らんとし、太公も亦夫人をいつの日か奪う決心をしながら、互に種々の理由や事情を理由として、僅かに窓と広場とから相見ると以って慰めつつ、一日一日を過すうちに歳月が流れ兩人共に老い朽ちたのであった。これを知ったフロレンスの人達は二人に同情し彫像と胸像が作られたとうわさが伝えられているのである。これには、種々の論議があると思うが私には、ブラウニングは人間が囚徒姑息のために、自らのなすべき事に優柔不断であることを咎めたものと解すべきであると思う。このような人生観はかれのどの詩にもどこかに見られるのである。ブラウニングが讚美する人間は自己の信念を実行する力と勇気をもつ人間である。身に覚えのないことで疑をかけられて、死に処せられんよりは、自ら身を殺した Luria 自らの命を全うせんがためいわが子を狼の餌食とした婦人を直ちに処刑した I van I vanoritch、あらゆる困苦と悲哀とに勝利の微笑を持って対した Herakles を高くみたのである。ブラウニングは人生の悲哀を深く感じるが故にそれに勝る努力を養うとするのである。人生のはかなさはかれには喜びの種であった。

註① かの女達の父 Benjamin Flower は Cambridge Intelligence の 篇輯をなし、政治的、宗教的に一大勢力を持っていたが、かれの監禁に際し二人の娘を友人 W. J. Fox の保護の下に預けたのであった。

② 拙著「ブラウニング鑑賞」第二章劇詩「パワセルサス」参照。

ロバート・ブラウニングの生涯とその作品

- ③ 同・「続：ブラウニング鑑賞」第七章，第八章悲劇「ストラフォード」参照。
- ④ 同・「ブラウニング鑑賞」第一章「ピパは過ぎ行く」参照。
- ⑤ 同・「続：ブラウニング鑑賞」第五章，第六章「ヴィクター王とチャールズ王」参照。
- ⑥ 同・「久遠の生命」第二編 pp. 120—128参照。
- ⑦ 第一編 pp. 57—66 参照。
- ⑧ 同・「続：ブラウニング鑑賞」第三章「悲劇紋地の汚れ」参照。
- ⑨ 同第二章「ドルズ人の祖国への帰還」参照
- ⑩ いづれの詩も石川林四郎，石田憲次の研究社「ブラウニング選詩」及び「男と女」参照。
- ⑪ 拙著・「ブラウニング鑑賞」第五章劇的独白詩「アプト・ヴォーグラー」参照。
- ⑬ 同・「続：ブラウニング鑑賞」第一章劇的独白詩「フラ・リポ・リピ」参照。
- ⑭ 同・「ブラウニング鑑賞」第四章独白詩「サウル」参照。
- ⑮ 同 第六章劇的独白詩「クレオン」参照。
- ⑯ 同・「続：ブラウニング鑑賞」第四章悲劇「露台にて」参照。
- ⑰ 同・「生命のリズム」参照。
- ⑱ 研究社・石田憲次，石川林四郎「ブラウニング選詩」及び「男と女」参照。
- ⑲ 拙著・「続：ブラウニング鑑賞」pp. 21，ll. 2-12参照。
- ⑳ 拙著・「ブラウニング鑑賞」pp. 238，ll. 1-16
- ㉑ 同 pp. 174，ll. 4からpp. 175，175の一行まで。参照。

参考文献

- (1) W. L. Phelps : Browning
- (2) Edward Dowden : The Life of Robert Browning
- (3) E. L. Cary : Browning
- (4) J. M. Cohen : Robert Browning
- (5) Percy Lubbock : Elizabeth Barrett Browning
- (6) Ernest Rys : Robert Browning and his Poetry
- (7) Tamots Sone : The Brownings
- (8) Mrs. S. Orr : Life and Letters of R. Browning
- (9) William Sharp : Life of R. Browning